



博物館空間に広がる景観的世界

浜田 弘明 (COE教員 / 桜美林大学・助教授)



私は現在、博物館学芸員の養成と文化地理学を教えることなどを主な仕事とし、本学大学院歴史民俗資料学研究科においても、今年度からスタートした博物館資料学コースの1科目を担当させて頂いている。しかし、一昨年春までは、準備担当を含め20年ほどの間、神奈川県にある相模原市立博物館において「人文地理」担当の学芸員として、博物館の現場に勤務していた。

博物館学芸員の人文分野というと、収集資料と密接にかかわってくることから、考古・歴史・民俗・美術史などが一般的なところであろう。博物館において、地理学出身で歴史や民俗、地質を担当している学芸員は何名か知っているが、「地理」そのものを学芸員の分野として位置付けている博物館は極めて稀のようである。私自身も神戸市立博物館の「歴史地理」や、埼玉県立川川の博物館の「自然地理」以外には、あまり耳にしたことがない。

確かに地理資料というと、一般には地図程度しかイメージされないのではなからうか。もちろん「人文地理」担当学芸員として、絵図・地形図・主題図をはじめとする各種の地図類、空中写真などの収集に力を入れ、景観の記録にも努めてきたが、それ以外にも集めるべき資料は多数あった。実際には、歴史資料でも民俗資料でもなさそうではあるが、地域にとって大切と思われる資料は多数あり、それらは人文地理担当である私が集め、調べるといった役割を果たしていた。とくに地域の都市化にかかわる問題は、地理学研究の一つの課題であり、一例をあげれば、戦後の急速な都市化や生活変化にかかわる資料、中でも高度経済成長期以降の生活用具（家電製品・量産品など）や印刷物（パンフレット・チラシ類など）などは、私が担当してきた資料の典型と言えるかもしれない。これらは、全国どこで集めても同じではないかとの批判もあるが、実はどこにも残されていなかったというものも少なくなく、また、一見地域性がなさそうなものにも地域性があつたりする。必ずしも、これらの資料や課題を地理学分野が担当すべきとは言わないが、少なくとも、地域の都市化や変貌を考える上で、地理学的発想

は有効と考えられる。

相模原市のような近郊都市において、戦後の都市化にかかわる諸問題は、地域の歴史を語る上で、また博物館展示の上で大きなテーマとなり得る。相模原市立博物館では、常設展示の中で「地域の変貌」というテーマを設けている。この展示コーナーは、大正期以降、平成期に至る地域の景観変化と、それとともに移り変わった人々の暮らしを主な内容としている。もちろんここには、準備段階に調査し収集した、家電製品や印刷物も資料として展示しているが、こうした実物資料のほかに、映像や模型も多用している。地域の「景観」と「土地利用」の変化については、4面の100インチのマルチビジョンで見せるとともに、縮尺500分の1の景観模型を10点製作し展示している。「地域の変貌」を視覚的に理解しようとする時、身近な「景観」の変化を目にすることは、一般市民にとって最もわかりやすい方法の一つであると考えられる。

博物館において、「景観」や「環境」にかかわる展示をよく見かける。航空写真をパネル化して展示しているだけのところもあるが、街の姿を縮尺模型にしたもの、遠近法を用いてパノラマ展示としたもの、ある場所を実物大に再現してジオラマにしたものなど、立体的に見せようとする様々な手法が取られている。このような、自分が知っている場所が立体的に再現された資料は、博物館では意外と人気のある展示の一つとなっている。

ある事象を図で説明しようすると、それを読むという少し特別な技術が必要とされることから、展示としては市民に敬遠されがちである。写真や模型についても、そうした「読む」技術が必要ではあるが、図に比べ、「見る」だけで雰囲気的に読み取れるものもあり、見る側にある種の気楽さがあるようである。展示の側としては、「読ませる」ための資料ではなく、「見せる」ための資料を工夫して提示することが必要である。

相模原市立博物館では、相模大野駅付近を500分の1に縮小した景観模型を4つ製作している。展示室では模型のみを展示しているが、模型の製作に当たっては、長年に

わたる景観調査を実施し、多数の景観写真・地形図・航空写真・建築図面などの資料を収集している。写真1～3は、相模大野駅付近を経年的に撮影したものである。見ればたった3枚の写真であるが、この間には13年という歳月が流れている。写真1は1985年撮影、写真2はその8年後の1993年撮影、写真3は、さらに5年を経た1998年に撮影したものである。恐らく、写真1と写真3だけを並べたならば、これが同じ場所のものだと思う人は少ないのではないだろうか。かつての景観の「痕跡」としては、右手のビルがそのまま建っている程度となってしまっている。この点で写真2は、この場所の景観変化の過程を伝える重要な資料となっていると言える。何となく見れば、風景が大きく変わったという実感はつかめるが、写真ではやはり「読む」という行為をしなければならぬ点もある。

このように、博物館展示として景観変化を示そうとした場合、継続的に撮影された写真によって示すことも可能であるが、「読む」という行為（技術）がある程度必要であり、また、その地域全体の土地利用や土地の起伏、質感・立体感までも直感的に伝えることは難しい。写真4は、この景観を立体的に表現した模型であるが、展示室においては、より直観的に「見る」という行為のみで伝わる情報が写真よりも多いのではないかと考える。

地域の変化を示そうとする時、景観的变化は理解しやすい材料の一つであり、中でも立体的な模型は効果が高いと思われる。しかし、安易な模型ではその情報や意図を伝えることは難しく、景観模型は地理学的に検証された諸資料をもとに製作されるべきである。

写真1



写真2



写真3



写真4

